

大正十年六月發行



光明

第
六
號

第
三
卷

光明團本部發行

目次

忙中閑味の閑ひ	忙しい者の目	病むため	涙するの故に	信するが復に	親の元に在り	狂風は健なれ	全てを赦せ	泉は涸れたか	全てをゆるせ	天下の師範生よ。教育者よ。	弱いの者は赦し得ない	自己の責任に敏感なれ	責任のないところ	自由を尊べ	離婚を待つ親に	新らしき同胞	同胞談話室	同費寄附者芳名	團費納附者芳名
.....																			

□ 卷頭の叫び □

貴方のその灰色な、冷かさうな、恐ろしい顔色はどうしたのだ。つんとすました、傲慢さうな態度はどうしたのだ。死刑囚のやうに塞ぎこんだ、何事にもおびおびする、疑ひ深い眼色はどうしたのだ。

貴方は蛆虫のわいた腐れ果てた、臭氣の鼻をつく貴方の心に愛想もつきず、固い我執の殻をかぶせて、「臭い物に蓋」してはゐないか。

貴方は貴方の言葉が、その醜く貴方の内部を出させないで飾つて呉れると思つてゐるだらう。けれど、貴方を一目見た者の第一印象は如何に貴方が飾つた

とて、言葉以上の言葉をもつて、貴方の腐れた内部を見ぬくだらうよ。

貴方はよく偽善といふ言葉をもつて貴方の腐れた蛆のついた臭い心を平氣で出すことを正しいと思つてゐる。貴方を人が愛しないで逃げて行くのも、貴方の其臭氣に堪へきれないのだと言ふことに氣がつかないか。魂を洗へ。蛆を取れ。貴方の生命を立てかへよ！ 貴方の内から清い香と、温い愛の泉が湧く

だらう。

忙 中 閑

□ 閑 の 味 ひ

忙しい忙しい。子供の成績物も見ねばならぬ。明日の授業の仕度もせねばならぬ。本屋から来た本もまだ手に取らないのがある。手紙の返事を書ねばならぬ。原稿の切も近いた。忙しい。忙しい。祝福された人間に與へられた食物なのだ。忙しいは堪へば堪ふべし。忙しいは。働く幸なり忙しいは。

閑。閑の味ひ。それは忙しさを味ふ人にのみ味はれる。目の廻る様な忙しさ、体の二つ欲しいやうな忙しさの間に、閑、それがほんとの閑である。朝から寝ておられるやうなそんな空時間は人間の味ふほんとの閑ではない。

□ 味 め る 閑

貴方は閑なでせう。けれど其貴方の閑は、千金の價ある閑ですか。喉の渴いた時清水

を拘むやうな閑ですか。味のある閑ですか。貴方が云ふ閑が仕事のないといふことを意味するならば、貴方は、生を食つてゐるのです。貴方の周囲には無数に人の手を待つてゐるものがあります。貴方は取つて、それを貴方の二十四時間の中味にしますか人に渡しますか。

忙しい者の目

貴方は忙しいでせう。けれども、貴方のしてゐる仕事がたくさん貯られてゐることは、貴方の忙しいことの證明にはなりません。それは忙しいのではなくて怠惰です。横着です。怠者は吐息をつき、忙しい者の眼は輝いてゐます。

病むために

もう三十日も薬がはなれない。昨日は鼻の兩側が痛んで夜十二時まで睡られず、湯を沸して温くめたので、今日は、大層氣分がよい。ペンが走る。頭が走る。頭が早くてペンが遅い。今日一日夜を徹してでも、書き續ける、昨日の夕方泉のやうに湧いて

出る想ひを、痛みのためにペンを棄て、寢間に入つた。

病氣はいゝものではない。けれど病氣して初て健康の味が知られる。僕は病の日が多い、けれども、病氣のために床につくことはない。忙しさのためには病氣すら忘れ得る。強さうで弱い私。弱さうで強い私。河馬のやうに強かつたら、今の私ではなかつたかも知れない。病氣をするが故に病む人のために泣き得られる。

涙の 後

私の走書の日誌の中に何の中にあつたのか次のやうに書いてある。

「オスカーワイルドがその名譽も、信用も失ひ、妻には去られ、最愛の子まで奪はれた時、彼の心にみなぎつたものは、只謙遜の感謝だけで、其中に新しい天地が潤け今まで敵であつた靈は彼の味方となつたのである。」と。

人間が全てを失なつた時、全てからつきはなされた時、涙の幾日は續くだろう。そして泣く涙もなくなつた時、あゝこれが人生かと微笑した時、其處には、偉大なる光明

さす世界への扉が見えて来る。そして今まで私を苦めた靈が、私の味方であることが知られる。そして、善惡を超越した光明の世界に導かれる。残るものは、謙讓な感謝のみである。

◇信ずるが故に

『吾は信するが故に語る』と

狂風は何も知らない。知つた人は満ちてゐる。私は知つたのでは飽きたらない。生命論を何冊讀んでも、何べん讀んでも、私たちに靈感はない。感激は湧かぬ。吾は信する！何といふ力強さだ。人間は知るが故に偉大なのではない。信するが故に偉大なのである。吾は信するが故に語る。もう一度「吾は信するが故に語る」。知識は概念である。物の見方である。言葉で言へやう。文字で書れやう。信仰は言葉でもない。文字でもない。ましてあの不完全な經文でもない。唯私の全体、私の生命全体が、私を私として、神秘を神秘として生かすのである。

◇親の元に復れ

「先生！先生！御許し下さいませ。今迄はよくよく眠つてゐました。あれほど先生が目覚めよと叫んで下さいましたが、少しも聞ずに、幾度先生を攻撃したか分りません。それのみでなく、毎月の光明すら手にしない月は大抵で御座いました。それをも先生はお怒りなく、愛しやう指導しやうの御心で、お出で下さいましたことが、三年後の今日、漸くわかりました。目が覚めました。私は何といふ馬鹿者でございました。ましてでせう。どうかお許し下さいませ。どうかお許し下さいませ。私は何といふ幸福者でございませうか。今迄は信仰とか死とか、眞實とか、そんなものは眼中になく、唯毎日の樂みばかり追ひまはして一日一日を淺墓に送つてゐました。何といふ恐いことでしたせう。……中略……嗚呼今は偉大な何ものかを授かつたやうな、何と云つてよいか分らない程、毎日毎日うれしくて、感謝のみで日送りさして戴きます。思ひ返せば先生は丁度私のやうな惡人、目覺めぬ人が、無意味な日を送

つてゐる者の可愛さを早くから感ぜられて、救済してゐて下さいましたのでございました事が分りました。あゝ有難うございました。先生が愛の力であれほど迄に叫んで下さいませんでしたら、人生五十年も、怨の戦ひで浮世三分五厘と、彼の人が悪、この人がよいとばかりで世を送るのでしたものを、先生の愛の力でゆりおこされました。私のこの幸福は如何なる、金銀財寶でも買ひ求めやうと思つても買ひ求める事は出来ません。……中略……どうかお許し下さいませ。さう／＼お苦しうございましたことでもございませう。あゝ愛の力、愛の力は恐ろしいものではないでしょうか。悪魔の角を折りつゝ何時の間にか感謝して行くやうになります。愛の力の恐ろしいことが身にしました。

私もこれから此感謝と愛を持つて人類の救済に立ちます。……忙中の閑、私は熱い涙にむせびます。全の子よ親の元にかへれ。其處には呪はれても呪い得ない親の愛がある。貴方はまだ見ない親、永遠の親の元にかへつたのだ。私のもとにかへる共に。

狂風は健在なり

雨も降ります。風も吹きます。

病にならうが、床につかふが、常に私は健在です。卑怯な犬が鳴きついたり、飼ひ犬に手をかけられたり、世間並のことはありますけれど、私は常に健在です。如何なる時も感謝してゐます。忙しさの内に。努力の内に。



全てを救せ

◇泉は涸れたか

人間よ、免しあへ。牙をむぎ、眼を怒らせて、血眼になつて、智慧の全てを使つて、肉をさき、血をすゝつて暮してゐるのが人生のほんとうだらうか、水の涸れた沙漠に木は茂らない。愛の泉の涸れた人間に、人間味はわからない。貴方は貴方の愛が涸れてゐることに氣附かないか。今の様に不自然な利慾の世界に飽ぎの來ない間、息づまる虚偽の生活に眼の附かない内は、貴方は貴方の愛の涸れてゐることに氣附かないのだ。目覺めて下さい。目覺めて下さい。唯簡單です。目覺めて下さい。私は今泣いてゐます。目覺めて下さい。

◇全てをゆるせ

赦せ。赦せ。悪人も、罪人も、愛、全てを赦す強い愛の前には救はれる。赦すことは

全ての者の開放である。赦す涙の中には善悪はない。赦せ赦せ無條件に赦せ。赦した者も、赦された者も、赦された愛赦した愛でのみ救れるだらう。

「互に呪ひあひ、争ひあつた二人でも、私たち二人は何といふ惡縁でせうと、手を取つて泣いたらお互に赦されると思ひます」。

さうだ、長くもない一生涯に、血眼になつて争ふとは何といふ不幸だらうと、敵と敵が手をとつたら赦されないこともありすまい。赦すことは我を捨てるのである。我を棄てて、より大きな自分を生ずのである。責める心には明に自分の小さい醜ひ殻がある。其殻を棄て、赦す心は、私の心を開いて、大きな自分と抱合ふのである。赦す心の其中にのみ、悪人も罪人も這入れる温かさがある。氷のやうに冷たい監獄のやうに厳しく、自分を固めて呪み合つてゐる者は一方が赦さない以上、永遠に呪ひを解かずに迷ふだらう。若し私たちが苦むなら、赦し得ない全てを赦し得ない自分の心を抱いて泣かう。

◇天下の師範生よ。教育者よ。

教育者諸君よ。師範生諸君よ。ルソーが自然に復れと言つてから、ペスタロツチが病める親なき子を育て、から、世界の幼き者は、自由の天地に引き出されました。私たちは、前途に榮光輝く幼き者の友として彼等を無限の廣野に導く人として、生きてゐることは何といふ幸福でせう。我身にヒシヒシと迫つて来る無言の靈感は歡喜よりも寧ろ恐れです。

大自然は恵です。めぐみ(萌)です。温い春の光のみ草木を萌せます。兒童を自然に復せ。それは彼等を教育者本意の型から出して、彼等を自由な温い愛の園に復らすのであります。彼等のあの天真な創造性を傷けないで育て得る力は愛に目覺めた私のみです。冷たい監督の目、骨を刺すやうな怒の言葉、彼等を去勢して、人形にして私の統べくゝりをつけた満足に甘んじてゐる間、彼等幼き者は呪れてゐます。

朝の空氣は清らかです。信仰の感謝に胸の高鳴る私が、五十五名の幼き者の前に立

つた時。「全ては救されてある」と彼等の健全顔をながめた時、其處に惡人がゐるでせうか。「全ては救されてある」其私の愛のみが、彼等の眞實の友であり導きであり得る資格です。喧しい規則の前にこそ、善い子供もゐるでせう。全てが救れた其前には可憐な一個の生命が、自由に大きに育つてゐます。ひねくれた心も卑法な心も、救れる愛の前にのみ開れて来る。

さあさあ本氣でと生みつけられたそれぞれの幼い生命が努力してゐる時何で鬼の目で睨めつけられやう。荒さみきつた冷たい教師の前に墓場が表れ、全てを救す愛の泉の流れつきない教師の前には、天の樂園其まよの光明世界が表れる。

一人の人間が惡を犯した時、嚴重な裁判の前には、彼の心は恐れと、悔恨と、罰に振いおのゝくばかりであつた。彼が全てを救された時、彼には、奮勵と感激とそして涙の外に何があつたらうか。全ての教育者よ幼き者の全てを救せ。救す涙の其中に一切の方法は生れて来る。

◇弱い者は救し得ない

救すとは、私が御に病んで卑法にも言ひ得ないのではない。強い私の全体が、呪ふ私から救れて強い強い私の生命の平和を保つのだ。弱い女の口と強い男の口とちらが激しい霜のやうな言葉を出すだらう。硬教育もいゝ、打つのもいい。けれど其あざれた鞭の内には、温い涙がなければならぬ。裏町の貧民窟を通る時私を苦めるものはあの罵り叫ぶ女の聲である。救れることのない彼等の子供は永遠に浮れない。

救す者は強い。強い者のみが救し得る。貴方は何も報酬を考へないで、全てを救せ彼はまだ目覺めない。彼は不幸なのだ。救し得る貴方は目覺めない彼よりも幸である。



自己の責任に敏感なれ

◇責任のないところ即ち暗黒世界

世の中が進んで、色々な、職業が出来、色々な社會が表れて來まして生活が複雑になつて來ますと、如何なる人も捨所なく、其才幹、其學力によつて皆働ける立場を與へられます。そして如何なる人が如何な仕事をしやうと、其處にはきつと其人にのみ與へられる自由の天地があります。今日のやうに世の中が分業的になつて來ますと、各の人には、其人自身の腦力を自由に働かす自由な天地を社會から委せられます。そして其委せられた天地は社會から孤立したものではありません。社會といふ有機体の一部でありますから、私たちが受持たなければならぬ分部分はそれが社會全体に關係を以つてゐます。ですから社會に對する責任は社會を作つてゐる全体の人が皆で責任をもたねばなりません。軍艦一隻に數百人の兵士が乗組んでゐて、戦争する時、砲を發射す

る一水兵が怠けてゐることは、他の數百人がしてゐる仕事全体の價値を少なくすることになります。世の中に法律を守らない人間が一人もないなら、あの監獄などはいらないことなのです。悪い人一人が苦しむばかりでなくて、善良な國民が皆で租税を出して、彼等のしたことの責任を負はなければならぬ。

私たちがしてゐることは、善いことにしても悪いことにしても、私のしたことの結果は皆社會に影響を及すのですから。一体に國民はもつともつと、自分の職業や、自分のしてゐることに對して、重い責任を感じて欲しいと思ひます。各々の人が責任を感じるこの深い社會は、人間の第一の慾求たる自由の尊ばれる社會であります。自由の尊ばれる社會は光明の輝く廣い温い無限に發達性をもつたほんとの人間世界であります。

◇自由と尊べ

國民全体がもつともつと自由を尊ぶといふ精神が出来なければ、お互に立派な社會に

住むことは出来ないと思ひます。自分の責任を輕んずることはすぐ他人の自由を尊ばないことになり、自分の自由を輕んずる精神はすぐ他人の自由を輕んずる精神であります。私自身の自由は、私自身が尊重して行くと同時に、他人の自由も尊重しなければなりません。自分のしたことがよい結果を生んだ時、それを自分の功にしようといふことを考へるのは人間の常でありますけれども、私たち目覺めんとする人たちは自分のしたことが悪い結果を生んだ時、それを他人に轉嫁しようとする様なことではなりません。私たちの自由意志でした以上は、善い結果だらうが、悪い結果だらうがいやしくも、自分のしたことである以上其責任は全部自分が負つて行くといふことにせなければならぬと思ひます。従つて、私たちのしたことは私が責任を負ふ以上、其ことを實行するについては、自分の自由意志によつて實行することが大切です。自分の意志が尊重されないで他人の意志で動いて行つて、其事について責任を負はないならば、社會には永遠に眞の道徳といふ者は存在しないと思ひます。

離婚國

一世一代の大事である結婚でも大分進んで来たとは言へ、世界一の離婚國であるといふ事實は如何にいゝ加減な無責任な結婚が行はれてゐるかといふことの證明だと思ひます。父兄たちは、自分の意志本意で子女の結婚を取りさめるし、子女たちも自分の意志よりも、父や兄の意見本意で、お父さんさへよければと、いふので他人事のやうに定められて、行つて見て良ければ居るし、良くなければすぐ歸つて来る位の氣で、こんな大事が行はれます。酷いになると、本人は全く不賛成であつても、無理に行かされてしまふのです。それで行くのが嫌なと言はふものなら、すぐ親不孝だとか、勝手我儘だとか言つて、情づくめで行かされるのです。こんな具合だから一度嫁入つて再び歸つて来ることもなんか、隣からかへつて来る位の氣らしく見えます。今の日本で戀愛結婚萬能論を唱へることは如何だらうかと思ひますけれども、少くとも結婚する本人たちにもつともつと、自由と責任とを與へて、もつと慎重な態度で結婚を取行

ひたいと思ひます。

亞米利加に行つて居る人と、日本にゐる女子との間にまだ寫眞結婚が行れてゐた頃高等教育を受けた婦人が、教育も収入も相等など云ふので、一枚の寫眞を頼りに渡米して見ると、案に違つた、教育も何もない年とつた老人だつたので泣いて悲しただけで仕方なく、一緒に床屋を開業したが、二人の病氣の時、夫は講談本を讀んでゐるし妻は新しい女の雑誌青踏を讀んでゐたとか。在米日本人が寫眞結婚なんか自分で止めてしまつたのは、賢いやり方だと思ひます。どうしたつて、四十にもなつた男に十七八の若い女を嫁すなんか、當前のやりかたではない。どうして、ギツシリした夫婦の愛の生活なんかが出来ませうぞ。寫眞結婚でなくとも、男が講談本に妻が新しい雑誌を讀んでる位の結婚は方々にありますからね。どうしてそんなことで圓滿な家庭が作られますか。男より妻の學力が劣つてゐるのは普通ですが。これとて男子が今までの様に女の人格を見とめないでほんの男の道具位に考へており妻もそれに甘んじてゐることで満足出来ればいいが、もつともつと結婚生活によつて、人間の能率を高めて行

こうと思へば、妻たる者にも夫に匹敵する位の學力が必要だと思ひます。
兎に角今の様に責任の敏感性を缺いだ結婚が行はれてゐる間、幾多の悲劇が出来る
ことは止むを得ないと思ひます。

◇子を持つ親に

三日にあげず夫婦喧嘩を子供の前に見せるやうな、子供の教育に對して敏感性を缺いでゐるやうな夫婦の間にはどうしたつて立派な子供が出来るものではありません。濕つばい陰氣な家庭にはのびのびした子供が生れたにしても、親たちの無責任のために其子供は持つて生れたいゝ芽が摘まれて行つて、低能な子供になつてしまはなければなりません。子供にはじめておきながら自分は道の中の立小便と云つたやうな、全く責任の敏感性を缺いだ家庭教育はたゞに子供の教育に一文の價値もないばかりでなく却つて濁りのない純眞な子供たちの眞實性を鈍らすものであります。

實業界などでは、酒と女に金を使はない者の人ではないらしい。私は信仰に入つた

野依秀一氏の懺悔を讀んで、おどろきました。あの恐しい梅毒などに罹つて、自分の妻に傳染させ、生れて來た子供にまで關係を及して、不具や白痴を生むなんてそんな恐ろしい罪が何處にありませんか。そんな親を持つた子供は一口に運が悪いと云ひますが、運どころではありません。親の因果を子が着たのです。そんな子を生んだ親は自分の不品行に對して、懺死してもいゝ位です。

一体に將來の親は何の考へなしに、無責任に子供を生んで、いゝ加減な人間を社會に出すといふことは考へねばなりません。子供が生れたら子供の時から一定の積立金は月々してやつて、將來の教育位は責任を持つてして行く考へでないで、とても立派な人間として自分の子供を社會に役立せることは出来ないと思ひます。特に悪いことをしても平氣なやうな道德に對して感じのにぶい子供を作ること、他日きつと社會に害毒を流すものであつて、こんな大きな罪惡はないと思ひます。よく子供の時になか／＼悪い位なのを見て、子供の時から人間好しではな／＼聞くことがありますが持つての外の心得ちがひで、すぐ大きくなれば親たちすら平氣で苦しめる種を播くの

であります。兎に角、一切人の親たるものは、もつともつと、子供に對して敏感でなくては、社會の進歩は出来ないと思ひます。

□

當然出席すべき會合に無届で缺席する位は、平氣で行はれてゐます。苟も自分といふ者をもつと尊い者に感じて自分をばつきり考へてゐるなら、當然自分として出てゐなければならぬ場所に出てゐないことは、自分を自分で辱しめるものであります。止むを得ないならば、きつと自分で出ない理由位は言つておきたいものだと思ひます。他人が自分を馬鹿にすると云つておこつてゐるけれども、自分を自分で輕んじてゐては意味のわからぬことだと思ひます。

時間勵行なども、今少し皆が目覺めて、道德に對する敏感が責任といふこと、眞の自由といふことゝを一緒に考へる時が來なければ、いくら申合せは出來ても駄目だと思ひます。

眞實目覺めんとする私たちの光明團ですら、もう二年位前に入團してゐながら、葉

書一本出さない人さへあります。勿論私は團員から來る、便を以つて満足しやうと思はないし、團費などさへ出せないなら十年出さないでも出て下さいとは申しませんが、そも／＼團則のない團體ですもの、一切の團員は團則なしに唯私たちの眞實が愛が私たちを團結さす尊い清い團體なのです。けれど、目覺めた人、目覺めんとする人は眠つてゐる人よりも、責任に對して、さうです、強ひつけられない責任に對して敏感であるべきだと思ひます。さうです目覺めることそれ自身が、私たちの生命全体を善惡に對して美醜に對し、正邪に對して、敏感にすることです。親しい懐かしい兄弟だと思つて訪れた時、「息子は三月はご前に吳に行きました。光明ですか。そんなものが來てゐるかも知れませんが。」何といふことでせうか。毎月毎月、手に豆を出して刷られ、不眠不休で、夜十二時一時と、努力の結晶で出來た光明が、何月も何月も讀れないで塵にまみれて居るとは、唯で送る物なるが故に吳に行かうと、出てゐやうと葉書一枚送らずにゐる。何といふことでせうか、こんな自分の損にさへならねば、人のことなんか考へなくてもよい人に（光明團に對してはそれでいゝ。免すも免さないも

ないけれど、目覚めるの、眞實のと、問題があるでせうか。まだ、夜明けの遠い、こんな眠つた人が、うよりうよりと暮してゐることが、私に新しい涙を流す種なのです。

□

私は終に言つておきます。人の偉大も、眞實も、責任に對して敏感な、罪に對して惡に對して、自然に對して、自己に對して敏感な人へのみ與へられることなのです。十七歳の時尋准の檢定をとつて、日浦東校に奉職し、十九歳で正教員になつた、中村石雄君が四月の末、熱におかされ、肺炎、腦膜炎と進んで歸の客となつた。中村君は今年二十歳だつた。私は四月十七日中村君に遭て共に算術の研究をした、其日別れる時僕は「中村君、君は、かへつて藤田里子様に私の言んとすることを聞いて下さいそして人を救ふ手傳して下さい。」と云ひました。けれど間もなく死んでしまはれたけれど、熱に浮された君は何を言つたか。

「天皇陛下に相濟まぬ。國家に御奉公せないで死んでは、皇太子殿下に相濟まぬ」

とそればかりだつた。何といふ純な何といふ眞面目な考へだらうか。そして又しみに話したこともない私の名度に出て、私に對する責任、まだ入圍もせない君が私に對する責任さへ感じて居られたさうであります。私が君を見た最初の第一印象は、頼み甲斐ある人。それでありました。君の日常は一切がこれ感心の至であつた。「私がこんなに出来るのは、信仰がさすのだ。と云はれたさうだ。あゝ敏感よ！責任に對する、敏感！それが一切を解決する。」

「靈の死んだ人形の生から脱したいと念じて居る兄弟のために、人形の世界に生き得ない人達のみの眞實の世界を創造して下さいませ。作つて頂かねばなりません。」

(今來た手紙の一節)

人形なら感じはない。愛の世界、眞實の世界、道德の世界、信仰の世界は、敏感な人の前にのみ、其扉が開かれる。

人形のやうに眠つておれ。何で眞實の叫びが聞けやう。何で親の愛がわかつて。何で、努力が生れやう。何で人生がわかつて。 (五月二十五日)

新しき同胞

安佐郡飯室村	沖本 あや子様	廣島市西横町	野間 勇様
安佐郡小河内村	増川 綾子様	崇徳中學校	田村 義稻様
安佐郡飯室村	吉田 坂次郎様	進徳高等女學校	久保木 都様
廣島病院	片倉 ますよ様	同	市原 美代子様
同	村本 しな子様	同	枇杷木 益子様
同	安田 清子様	安佐郡小河内村	小下 澤見様
廣島市新川場町	井上 さら子様	安佐郡鈴張村	仲野 潤三様
廣島郵便局	比日谷 生様	安佐郡久地村	川本 静馬様
同	植 野様	安佐郡狩小川村	谷 口 讓様
同	曾 根 勳様	吳市曙町	原 照三様
同	玉 置様	賀茂郡廣村	鈴木 百三様
同	高田 正太郎様	臺灣基隆	河野 俊雄様
同	高田 廉次郎様	京都岩倉看護婦學校	和田 よし子様
廣島市外三篠町	廣 能 次郎様	三原女子師範學校	鳥羽 きよか様
工兵第五大隊第一中隊	幸 坂 普様	安佐郡久地小學校	日野 芳子様
		安佐郡鈴張村	井手 口 悟様
		安佐郡飯室村	坊川 一人様

同胞談話室

光明團久地支部にて 岡本實太郎

光明團員諸兄姉よ、暑いと云ふ聲も自ら出る様になりました。久しく御無沙汰ですみません。多くの團員諸兄姉も健實に修養に進んでおられること存じます。私も健實に健實に修養、實行に進んでゐます。

第三卷第四號の第一頁に、先生が特に手厚に教導下された如く、「世の中の全ては修養の言葉にも叫びにも飽いてはや沈黙に入るの時である」と。何といふ殿しい教導だろう。私はこれを手に取つた時、これを読んで時、何物か偉大な力に得られたのであります。我々をして喜悅の外何物もなかつたのであります。我々の身邊全て沈黙に沈黙にそして實行が欲しいのである。多くの團員諸兄姉よ、沈黙して實行に、私は切に希望してやみません。廣島支部の井上翠葉君先日來色々御心切に御指導有難う。謹んで感謝の意を表します。飯室村天廣宇一君其後相變らず奮闘ですか。御伺ひします。廣島支部女子部の方は一向存じませんが時々其状況御知らせ下さい。當支部に

協議決定事項

- 一、事務所を藤枝信亮氏宅に設置す、
- 一、左の通り役員推選す
支部長 宮本桑三郎氏
幹事長 藤枝信亮氏。藤枝枝氏
幹事 西川清一氏 相本秋次氏、井上敏器氏、津島春作氏、橋本一登氏、川手登氏、河本ウメノ氏、富井小春氏、森文江氏、久保静江氏。
- 一、女子部幹事一名増員、後日女子部にて推選のこと。
- 一、役員任期は満一ヶ年とし毎年四月改選のこと
- 一、定期總會は毎年四月十月の二回とす
- 一、廻覽誌年三回發行のこと。

も女子の方が多数ありますから又御報知致します。

光明團廣島支部總會報告 井上 翠葉

五月十五日日曜日午前十時より市内水主町説教所に於いて第一回支部總會開催せり。藤枝信亮氏の開會の辭に始まり津島春作氏の経過報告あり、次で協議に移る。

一、本部納附團費は壹圓貳拾錢とすこと。
一、支部會費を毎月金五錢宛とし、支部の費用に充つ。

正午休憩、午後二時再會、午後出席せられ住岡たる先生の有益なる講演ありし後、自己紹介並に團員の叫びあり。次で福引、詩吟、劍舞、劇、等約十回にわたる餘興あり。藤枝氏の閉會の辭にて散會す時に午後五時。

工兵第五大隊第一中隊一年志願兵 細井 隼 人

團員の皆様縁の木蔭を好む時節來はましたが、皆様はそれ／＼目的のために努力してゐられる事と推察します。私は昨年十二月工兵隊に入營して元氣で軍務に勉勵してゐます。大分軍隊に慣れて來ました故日曜など御訪ね下されば隊内を御覽に入れます。御訪ねの節は豫め御報知下されば外出しないで待つてゐます。今後は哀れな者と思つて御交際下さい。隊内では、只友より來る手紙が自分を慰めて呉れるのみであります。原村演習も終り早瀬の漕舟演習實施後は隊内にゐます。益々暑くなりますから皆様御身体を御大事に。さよなら

いつしか青葉の時節となりましたが其後御懐しい先生を初め皆様には御變は御座いせんか。久しぶりに尊い紙上で御話しの出來る事を此上なく光榮と存じます。廣島支部も、津島様井上様光岡様三上様等の御盡力に依つて大分盛大になりました。四名様方にも御多忙の御身ですのに、こうして支部發展のため御勉め下さるので、喜んでゐます。三上様は三次に光岡様は奥にいらつこやいますやうですが、尙前と同様に光明團のために御盡力下さることをお願い致します。私等も出來る限りつまらない者ですけれども盡させて戴きます。先月も何時にも變らず光明が机上に來てゐましたので早速拜見致しました。嬉しさの餘り動氣は高鳴り夢中になつて讀みました。信仰の扉を一句宛讀む毎にあゝさうです／＼と深い共鳴を捧げつ、心から有難く存じました。そして又、入江操様と研木様とが、先に逝かれた三姉の後を慕つて此の世を去られたことを非常に悲しうございまして私はほん／＼に死を呪ひたくなりました。どうか皆様御健康で在つて下さいませ。そして一日

でも光明團のために盡して下さいませ。かうして何處のはてにゐても先生の御指導受けつゝ楽しい一日を暮ることを喜びます。皆様梅雨も近いて來て來ました。体を御大切に下さいませ。

團費寄附者芳名

一金壹圓 精神大病人様
一金貳圓 廣文館書店様
一金壹圓 手島好子様

團費納附者芳名

一金五圓 播磨 權六様
一金壹圓參拾錢 沖野 靜代様
上杉 九郎様
松川 朝代様 熊田 かね子様
寺尾 一江様 富井 小巻様
濱村 久子様 手島 好子様

一金壹圓

加納 史枝様 重村 つや子様
小林 はるの様 川崎 久代様
渡邊 たしみ様 佐々木 靜人様
丸木 位里様 古寺 清美様
宮城 しも子様 橋本 一登様
立川 さだ子様 森 君 枝様
津島 春作様 高田 正太郎様
井上 敏器様 佐々木 要様

來須 眞二郎様 竹添 春藏様
桑原 お八重様 西崎 巧様
樋口 貞代様 野田 善友様
剛家 正巳様 仲野 潤三様
研谷 よしを様 研谷 よしみ様
森岡 秀郎様 吉田 坂次郎様
森 文江様 久保木 都様
木原 美代子様 枇杷木 益子様

小川 義三様 前田 義雄様
 澤井 秀夫様 住吉 智恵子様
 中谷 末一様 元木 あやめ様
 國増 常子様 木原 薫様
 藤浦 主伴様 瀧野 文夫様
 國本 芳夫様 佐々木 定夫様
 藤本 春人様 藤本 鈴己様
 平野 澄子様 竹末 齊様
 川本 貞夫様 山崎 とも様
 上田 ふなよ様 百田 正夫様
 前中 村子様 佐々木 つるよ様
 宮本 かはよ様 船木 良市様
 武田 君代様 船木 ひなよ様
 佐々木 はなみ様 藤枝 信亮様
 前田 よし子様 安田 清子様
 田中 義雄様 廣澤 壽人様
 中川 まき子様 金子 小雪様

村本 しな子様 東方 こう様
 森 文江様 相本 秋次様
 田村 義稻様 猪足 照夫様
 森田 昇様 佐々木 利一郎様
 山本 充象様 藤田 里子様
 大山 虎正様 築道 四郎様
 和田 よし子様 三川 いとよ様
 中丸 いづの様 中野 かや子様
 一金五拾錢
 岡 勇様 岡本 實太郎様
 前谷 房代様

人を信するは、人未だ必ずしも
 盡く誠ならず已れ則ち獨り誠なり。
 人を疑ふものは人未だ必ずしも詐らず。
 已れ則ち先づ詐る (榮根諷)

大正十年六月十五日印刷納本
 大正十年六月二十日發行

(非賣品)

廣島縣安佐郡飯室村一五四四番地

編輯兼 住 岡 狂 風
 印刷者

廣島市鷹匠町三十六番地

印刷所 三友社印刷所

廣島縣安佐郡飯室村一五四四番地

發行所 光明團本部